
XSPA10周年によせて

XML 1.0制定当時のXML WGメンバー

慶應義塾大学政策・メディア研究科特任教授

村田 真

貴協議会は、日本における学術出版へのXML応用を切り開いてこられた。XML制定に深くかかわった人間の一人として、心よりお礼を申し上げたい。

一時は、データ交換に使える、HTML再構築のベースになると期待されたXMLだが、いまは原点に回帰したように思える。つまり、しっかりとした文書構造を手間暇かけて作りこみ、印刷だけではなくモバイル環境やアクセシビリティに対応する。これがいまのXMLの主な利用形態であり、学術出版もその一つである。

私は、文書の記述と処理の言語に関する標準化を担当するISO/IEC JTC1の副委員会（ISO/IEC JTC1/SC34）に長らく関わっているのだが、ここでも国際規格をXMLに基づいて作成するようになった。具体的には、JATSを国際規格用に拡張したSTSという言語を用いる。WordからSTSソースを自動生成し、このSTSソースからPDFファイルやEPUBファイルを生成する。

もちろん、文書情報のXML化につきもののトラブルはいろいろと発生する。トラブルなしに国際規格を出版したいという委員長としての気持ちと、XMLベースの出版フローを推進したいというXML技術者としての気持ちが自分のなかでもせめぎ合っている。貴協議会のみなさんも同様の経験をされていることと思う。

一つ重要な指摘をしておきたい。それは、アクセシビリティにおける構造の重要性である。例えば、盲人は文書の構造を利用した拾い読みを望んでいる。いかに美しいレイアウトであっても、文書の構造が崩れていれば何の役にも立たない（お手元のいくつかのPDF文書の音声読み上げを試すと直ちに理解できる）。XML化の努力はアクセシビリティに有益である。

2023年2月には、XML 1.0勧告ができて25周年になる。かつてのような熱狂こそないが、今後とも文書情報のXML化は重要であり続けるだろう。道は平坦ではなく、むしろ難行苦行に等しいかもしれないが、貴協議会の健闘を信じ、幸運を祈る。